

高木貞二前学長御退任関係記事

高木貞二前学長略年譜

明治二六年一二月三日 大阪府に生る

大正七年七月

東京帝国大学文科大学哲学科卒業（心理学専攻）

自大正八年九月
至大正一〇年三月

歐米に留学、主として北米コーネル大学大学院に於いて心理学を研究

自大正一一年三月
至昭和八年二月

第三高等学校教授

自昭和四年三月
至昭和九年三月

京都帝国大学文学部講師

自昭和八年五月
至昭和一八年五月

東京帝国大学文学部助教授

自昭和一九年三月
至昭和二九年三月

東京帝国大学文学部教授

自昭和二二年四月
至昭和二五年三月

東京帝国大学文学部部長

昭和二三四年四月

動物心理学会会長

自昭和二四年一月
至昭和三二年一月

日本学術会議会員・同第一部長

自昭和二四年三月
至昭和三二年三月

国際心理学会常任理事

自昭和二四年四月
至昭和三二年一〇月

日本心理学会会長

自昭和二四年五月
至昭和二七年三月

東京大学教育学部部長

自昭和二五年四月
至昭和二八年三月

東京大学附属図書館館長

自昭和二七年二月
至昭和二九年三月

東京大学教養学部部長

自昭和二九年九月
至昭和三七九年九月

科学基礎論学会理事長

自昭和二九年八月
至昭和三七九年八月

東京女子大学学長

昭和二九年五月

東京大学名誉教授

自昭和三一年七月
至昭和三二年二月

科学技術審議会委員

昭和三三年三月

日本学士院会員

昭和三六年一〇月

国語審議会委員

高木貞二前学長主要著書・論文目録

- 「山雀に於ける明るさ選択反応の移調に及ぼす背景の影響」
『心理学研究』第一〇巻第五六輯 昭和一〇年
- 「山雀の明るさ選択反応に於ける相対的要因と絶対的要因」
『速水還曆記念論文集』 昭和一二年
- 「近接の要因並びに類同の要因に関する実験的吟味」
『心理学研究』第一五巻第一輯 昭和一五年
- 「位置及び方向の恒常に関する実験的研究」
松本喜寿記念『心理学新研究』 昭和一八年
- 「形態心理学」
『現代心理学序説』 昭和二四年
- 「現代心理学の理論的基礎」
『現代心理学の展開』 学生書房 昭和二四年
- 「科学とは何か」
共著 弘文堂 昭和二五年
- 「実験法」
『実験心理学提要』一 岩波書店 昭和二六年
- 「山雀に於ける明るさ選択反応の移調に及ぼす背景の影響」
『心理学研究』第八巻第四輯 昭和八年
- 「山雀に於ける形の弁別並びに形の恒常に関する実験的研究」
『心理学研究』第八巻第四輯 昭和八年
- 「山雀に於いて観察せられる位置の恒常」
『動物心理学年報』第一輯 昭和九年
- 「律的動作の研究」
心理学研究会刊 大正一〇年
- 「ハ感覚V概念の排棄」
『思想』一五号 大正一五年
- 「矛盾冷覚の条件と性質について」
『心理学論文集』第二輯 昭和二年
- 「重量の弁別閾に及ぼす温度刺激の影響」
『心理学論文集』第三輯 昭和三年
- 「知覚研究の基本問題」
『松本還曆記念論文集』 昭和六年
- 「聯想心理学と統覚心理学」
岩波講座『教育科学』 昭和六年
- 「知覚の問題」
岩波講座『哲学』 昭和七年
- 「山雀に於ける形の弁別並びに形の恒常に関する実験的研究」
『心理学研究』第八巻第四輯 昭和八年
- 「山雀に於いて観察せられる位置の恒常」
『動物心理学年報』第一輯 昭和九年
- Proximity and Similarity in Visual Perception: Proceedings and Papers of the thirteenth International Congress of Psychology at Stockholm 1951.*

高木貞二先生の業績を顧みて

相 良 守 次

高木貞二先生は大正七年東京帝国大学文科大学を卒業されたが、翌年にはヴントの高弟ティチナー教授をたよって、アメリカのコーネル大学に留学された。この、イギリス人であるティチナー教授は、その規模が大きくなりすぎたために不統一なところもあつた師ヴントの心理学体系の、不合理なところを整理して構成心理学を洗練した人として、また、きわめて精緻厳密な研究法をモットーとした内観心理学の創始者として令名のたかい碩学であつて、頭脳の明敏、思考の明晰なことできこえていたが、高木先生の体系的思考の明晰さと実際研究に際しての条件設定の厳密さとを重んずる精神は、このティチナーの学風をうけつがれたふうが見受けられる。

先生が帰国された当時の日本の心理学界は、ようやく科学的心理学の研究が軌道に乗りはじめた時代といつてもよいであろうが、それ以来、現在の隆盛な活動を示すにいたるまで、先生は、わが心理学界の理論的開拓に、実験的研究の精練に、嚮導的な役割を演じてこられた。わたし共後輩は、以下にのべる先生の論究にすむべき道のしるべをあたえられ、また先生の実際の研究の操作に、わたしの友人の言葉をかりれば「珠玉のよ

うな」手本をみいだしてきたのであつた。

先生の東大における卒業論文の題目は「律動的動作の研究」であつたが、この研究のために特殊の無声拍音装置を考案され、これを握りしめて行ふ律動的動作を分析されたものであつて、先生の後年の巧緻な研究の先驅をなす精密な研究であつた。

先生が帰国されたころのわが学界は、まだヴント流の構成心理学的思想がゆきわたつていたが、大正の末期になると、構成心理学の採る要素観を真向から否定するゲシュタルト学派の理論が紹介されるようになり、この両理論の対立論争がわが学界でも行われるようになった。ゲシュタルト心理学の構成心理学に対する批判の中心は、前述のように要素観の排撃であるが、それにむすびついて、要素観に踏まえて認められている心的要素としての「感覚」、これに攻撃の矢面がむけられていた。先生は、このような心理学における理論の動向にふかく省察を加えられ、「感覚概念の排棄」および「感覚の問題」の二論稿によつてその見解を表明されているが、さらに「知覚研究の根本問題」においては、知覚研究に採らるべき観点について、その考察を披歴された。

ここに披歴された先生の見解は、ゲシュタルト学説にふかい共鳴を寄せられたもので、先生はここに、コーネルで学ばれた師ティチナーの学説を脱脚する立場に立たれることになった。しかし先生の理論的省察はまことに周到で、徒らに新考想を迎え入れるのではなく、過去の学説の寄与した功績や、あるいは

学史的に果した役割を公平に評価された上で、研究の進展について露呈するにいたったその欠陥を指摘し、かくして、それを修正する理論はいかなるものであるべきかを、じゅんじゅんと言われるというふうで、まことに説得力に富んだ論述である。

たとえば「聯想心理学と統覚心理学」はその学史的役割と貢献とを適切に評価された好例であるし、「知覚の問題」は新しい立場が古い学説のいかなる欠陥の認識より展開されたかについて明晰な分析を行い、その論拠を明示された好例である。当時、理論の帰趨について右顧左弁、惑いの多かったわが学界に、これらの論究が与えた影響は大きく、わたしなども再読、三読して蒙を啓かれたものであった。

先生はゲシュタルト理論の長所を率直に認められたが、先生の目指すところは、常に心理学をして科学としての水準をたかめるような理論ないしは知見を探索することであったので、その点からみて、ゲシュタルト理論はそれ以前のものより一歩前進していると評価されたところから、これを採りあげられたに他ならない。それゆえ、先生はゲシュタルトの立場に賛同されながらも、たえずよりすぐれた考想ないしは観点を求めていたのであって、ゲシュタルテストになられたわけではなかった。その証左は、折からアメリカ学界で唱導されはじめた操作主義の主張を知られるや、逸速くこれをうけいれられ、また「現代心理学の理論的基礎」においては、ゲシュタルト学派の、特にレヴィーの理論構成の仕方よりも、行動主義出身のツールマ

ンの理論構成の方法が、一歩先んじたものと評価されたことなどに、みることができると。

右の論文は、先生の労作のなかでも、その截利な方法的知見と学殖のふかさの滲みでているもので、わが学界がゲシュタルト理論の洗礼をうけて以来再度訪れた理論的展開期に、そのすすむべき方向に対する適切な示唆を与えた好文献であって、それ以後の趨勢が、ゲシュタルト理論を止揚して行動科学的立場へと傾斜してゆく松明ともなったのであった。

以上のように、先生は常に、心理学の変遷にかふい関心を払われ、適確な洞察にもとづいて理論の展開する帰趨を見究め、新しい理論の開拓には常に先鞭をつけられて、わが学界を指導してこられた。大学の教壇においては、ながらく実験心理学を担当され、心理学研究法に関する造詣のふかい講義を授けられたが、戦後、推計学的実験計画法や検定法が導入されると、卒先してその重要性を説かれ、学生の訓練に努力されたのも、今日の数学的心理学の発展の先駆として大きな貢献であった。

いうまでもなく、科学における新しい理論は、實際研究によって見出された新事実を基礎に、その意義が明らかにされる。高木先生の理論的展開も、内外の実証的事実に加えて、先生自身の研究成果をもってその裏付けをされている。

まず構成心理学の時代に寄与された「矛盾冷覚の条件と性質について」および「重量弁別閾に及ぼす温度刺激の影響」の両研究は、構成心理学の学説にとって中核的意味をもつ感覚的事

実について検討されたもので、皮膚感覚や運動感覚のそなえる諸性質間の相互影響が、いかなる条件のもとに生ずるかを分析されているが、これらの研究のなかには、はやくも次代の理論の中心問題になった知覚体制の全体規定の仕組みが指摘されている。

ついで、ゲシュタルト理論に共感されていた時代には、ゲシュタルトの立場から注目されていた知覚における恒常の問題および移調の問題に関して、ヤマガラを被験動物とした数種の考察を行われているが、これらの研究において先生は、ゲシュタルト学派の行った諸研究が、まだ条件分析の足りない点を鋭く衝かれ、すぐれた理論的補修を加えられた。またゲシュタルト理論の拠点ともいえるべき自律的知覚体制の基本法則についても、截利な分析を試みられ、「近接の要因と類同の要因に関する実験的吟味」の労作では、「近接」および「類同」の要因に関する従来の概念規定の必ずしも明確になっていないことを指摘し、これらの概念を規定するために採るべき操作条件を明らかにされた。

この時期における先生の実験的業績は、ゲシュタルト理論の成熟に資するところの大きいものであるが、また同時に、操作主義的行動理論の成長をも促しているものであって、先生がゲシュタルトの立場より行動科学的立場へ、その歩みを展開される道程における実証的基礎をなしているように見受けられる。

なお、以上の先生の実験的研究にみられる特徴は、その実験

計画がまことに巧緻、実験のはこびがまことに周到適確、一抹の疑念をも挿ませぬような整然たるもので、前述のように、わたしの友人の「珠玉のような」という形容のふさわしいものであった。われわれ後進の間で、自分もひとつ、高木先生のような実験をものしてみたいものだと言合つたことは、今にして記憶に新しい。

先生の業績はもちろん以上に盡きるのではない。いわゆる応用的研究の領域でも先生はいろいろの研究を指導されている。古くは東大附属航空研究所心理部の嘱託として航空心理の研究指導に携われ、戦後は教育研究所の研究に協力され、進学適性検査の問題等を手がけられている。その他、行動数理研究会を主宰される等、いろいろの研究グループを指導された。日本心理学会会長、日本動物心理学会会長、日本学术会议第一部部長その他、先生の学会、学術行政などに尽された業績は、多々あることを承知しているが、その方面のことは、わたしよりも他にこれを語る適当な人があるであろう。

先生は、東大在職の後期数年間、文学部長、教養学部長、図書館長などを歴任され、御多忙のため、御自身で実験を手がけられる余裕もほとんど失われていられた。先生にとっても心残りであられたかと推察するが、われわれ後進にとっても、先生の美事な実験のお手際を拝見できなくなったのは、残念なことであった。戦時中に、ほとんど一日も欠かさずに一年余にわたってなされたサルの紐引きの実験も、未発表のままになってい

ると記憶している。

過般、東京女子大学学長を退かれるにあたって、「自分の歩
ゆんできた過去に、なんの悔いところもない。もう一度生れ
代るなら、また心理学をやりたいとおもう」と語られたと仄聞
し、ふかい感動をおぼえた。学長御在任の終りには、すこしお
疲れの御様子であったが、最近はまだすっかり御元気になられ
ている。これからまた以前のように、現代の心理学について、
あるいは将来の心理学について、先生の見解を伺う機会をもて
ることは、非常な楽しみである。切に先生の御加餐を希うしだ
いである。

一九六四・一〇・二九